

人権啓発作品を
紹介します



【作文の部】中学生の部
最優秀賞

河南中学校 三年 江竜 俊喜さん

「福祉体験で
見えたこと」

介護センター等での職員の高齢者へのいじめ、家族にも看取られずに孤独死される方々。そういったことをニュースで時々耳にする。それだけで僕は、福祉に対して知らず知らずのうちに後ろ向きな印象と勝手な先入観を持つようになつていた。だから学校の福祉体験学習の一環で地域のデイサービスセンターに行く時もあまり積極的ではなかつたと思つた。

方々もここにこゝ笑っている姿が目にとび込んできた。利用者さんは互いにお話をしたり、折り紙や絵を書いたりしていた。ただそれだけなのに、とても楽しそうだった。生き生きとしていて輝いて見えた。

デイサービスセンターでの体験は利用者さんとのふれ合いが主だった。最初は、マイナスのイメージを持っていたことと緊張していたことによりあまり会話をすることができなかった。そんな僕の様子をおじいさん、おばあさんは察してくださったのだろう。向こうから話しかけてくださった。そのため僕はすぐになじむことができた。利用者のみなさんは本当のおじいちゃん・おばあちゃんのように優しく接してくださった。だからぼくも自分のおじいちゃん・おばあちゃんと生活するかのようになつてしまった。するとあまりやりたくなかつた、おじいさん・おばあさんの髪を乾かす仕事も何の抵抗もなくなつてしまった。

しかし実際に体験してみても、自分で想像していたような「暗い」、「重労働」といった仕事ではないことが分かつた。デイサービスセンターに入つてすぐに利用者さんも職員の方

「こゝで過ごすのは楽しいですか？」と尋ねた。するとそのおばあさんは、「楽しいよ。でも家族と一緒にいる時間の方がもっと楽しいよ。」とおっしゃつた。「普通のくらしの中の幸せ」が福祉だと学校の事前学習で教えてもらつていた。そのデイサービスセンターには畑やキッチンがあつて、より家庭的な空間が作られていた。そしてそこで楽しそうに、

幸せそうに利用者さんは過ごされてきた。こういった施設こそ、高齢の人にとつての第二の家ではないだろうか。そういう風に考えていた僕にとつてそのおばあさんの一言はとても衝撃的だった。

僕は今、祖父と祖母を含む家族六人で生活している。中学校三年生という反抗期の中で、ささいなことでも「うるさいな!!」「少しは黙ってくれよ!!」とけんかをすることがある。その度に祖父も僕も互いに傷つくことになつてしまふ。そんな僕でも大切な孫として、家族として心配してくれているのだ。毎日の生活を家族と過ごしていると必ず衝突が生じてしまふ。しかしそれは互いに深い愛情を持っているからこそで、大切だと思つているからだ。家族という存在は他とは比べものにならない一番の宝物だと思う。そして僕達は時に、身近にありすぎてその大切さに気付けない事がある。それらを僕は、あのおばあさんの一言によつて知れたと思つた。

「人」という漢字は二つの人に見た

てた棒が互いに支え合つてできているとよく言う。しかし「支える側」と「一方的に支えてもらう側」に分かれているとも聞いたことがある。つまり今の僕が不自由なく、幸せに生活することができているのは裏で家族が支えてくれているからだと言えるだろう。

僕はこれから受験勉強をさらにがんばらないといけない。そしてこの先の人生にはさらに大変なことがたくさんある。その途中でくじけたり、不安になつたりもするだろう。その度に家族に助けをもらつたろう。だから家族の誰かが病氣にかかたり、何かあつた時は僕が支える側になりたいと思つた。家族はかけがえないものだと思つてきた。これからは思いやりの心と周りの人達への感謝の気持ちで絶対に忘れないようになつて、毎日を過ごしていこうと思つた。また先入観や偏見を持つことは恐ろしいことだと今回の福祉体験で気付いた。僕はまだ気付いていないだけで多くの偏見を持っているかもしれない。思い込みや偏見を持つことの恐ろしさは常に意識し、物事に取り組みの際は広い視野を持つて自分を見つめていけるよう努力していきたい。